

## 第 6 回高校生カンボジアスタディツアー

～内側から見たカンボジアと向き合う～

大阪教育大学附属高等学校池田校舎 Kaori W.

『なぜ戦車を作ることは簡単なのに、学校を建てることは難しいのでしょうか。』——私が途上国の教育に関心を抱いたきっかけは、マララさんのこの言葉でした。

今回のスタディツアーで、私は“内側から見たカンボジア”をテーマに、カンボジアの識字教育の現状と、その歴史的背景や現地の人々の自国に対する思いに焦点を当てて学んできました。現地の人々との交流や自分が目にしたものからの学びの中で、衝撃を受けたことや、特に心に刻まれた出来事をいくつか紹介させていただきます。

### ◎私たちはなぜ勉強するのだろう？

今回私たちが見学したリエンダイ寺子屋の復学支援クラスは、小学校をドロップアウトした子供たち向けのクラスです。ところが、到着後早々に私はとても驚きました。寺子屋の子どもたちの元気な声と、生き生きとした姿があまりにも私の想像していた姿とかけ離れていたからです。

子どもたちは、未来への期待に満ちていました。「この村にはお医者さんがいないから、将来は医者になって村の人を助けたい」と話す女の子や、「大工さんになってみんなの家を修理してあげたい」と話している男の子もいました。寺子屋で学ぶ子供たちの話を聞いていて気付いたのは、彼らはみな、困っている“誰かのため”の夢を持っているということです。「困っている人を助けたい」という強い気持ちとともに、「そのためにもっと勉強したい」という熱意で溢れていました。

そして、そんな子どもたちは、私に自分の将来について改めて考えるきっかけを与えてくれました。私は、勉強したいと思えばすぐに勉強できる環境にいます。だからこそ、私がつと勉強して、寺子屋の子どもたちが夢をかなえるために勉強できる未来をつくりたい、と強く思うようになりました。大切なことに気付かせてくれた寺子屋の子どもたちには感謝の気持ちでいっぱいです。



▲ 復学支援クラスの授業の様子

### ◆寺子屋 (Community Learning Center) とは？

日本ユネスコ協会連盟が支援し、学校外での教育を行うために地域の人々が中心となって運営を行う学習施設。カンボジアでのアンコール寺子屋プロジェクトでは、小学校をドロップアウトした子ども向けの「復学支援クラス」や大人向けの「識字クラス」などの基礎教育、経済的な自立を支援するための「収入向上プログラム」など、様々な方面での支援を行っている。寺子屋での学習はすべて無償。復学支援クラスでは小学校 6 年分の勉強を 2 年間で行い、小学校の卒業資格を得ることができる。現在はシェムリアップ州内に 17 の寺子屋がある。

## ◎時間がないから学校に行けない



▲ ほうき作りを手伝う男の子

カンボジアは学校が午前の部と午後の部で別れているので、学校がない時間帯には働いている子どもも多いです。マーケットでの売り子や車屋での洗車、夜間のアプサラダンスのステージの踊り子など、さまざまな場所で働く子供たちを見かけました。

また、寺子屋に来ていた子どもたちも家事や家業の手伝いをしている子が多く、私が家庭訪問した寺子屋の生徒の12歳の男の子のお家では木の枝を束ねたほうき作りをしており、彼のお母さんによれば、彼もよくお手伝いをしてくれるとのことでした。日本では家事の手伝いをする習慣がない子どもも多いので、家計や家族を助けるために積極的にお手伝いをする子どもたちの姿に感心しました。

ところが、子どもたちの労働は学業に大きな影響を与えていることが分かりました。カンボジアの就学率の低さの原因には、経済的に苦しくて学費を払う余裕がないということもありますが、「学校に行く時間がない」というのも原因の一つです。それを聞いた時、私はなぜ時間がないのかと疑問に思いましたが、経済的に苦しい家庭の子どもたちは家計を助けるために働かなければならず、小学校に通っていたとしても出席できなくなり、最終的には授業についていけなくなって学校をやめてしまうケースが多いそうです。カンボジアでは義務教育である小学校でも、学年を上げるためには毎年試験を受けなければならず、合格できなければもう一度元の学年のやり直しになってしまうため、貧しい家庭の子どもは小学校を卒業することが難しいとのこと。

当たり前のように義務教育を受けてきた私は、働かなければならないから学校に行けない、ということがショックでした。カンボジアでは子どもたちも重要な労働力になっていますが、それにより彼らの未来の選択肢が減ってしまうのは、さらなる悪循環を招きかねません。寺子屋や家庭訪問先での交流は、カンボジアの子どもたちのように仕事があるために学校に行けない子どものいない未来を築くために、未来を担う私たちに何が出来るのか改めて考える時間になりました。

## ◎様々なところに表れる格差

私たちはカンボジアの首都プノンペンからシェムリアップまでをバスで移動しましたが、その中で一番強く感じたのは**都市部と農村部での格差の大きさ**です。プノンペンは高層ビルや三階建て以上の建物を沢山見かけましたが、中心部から30分ほど離れたただですぐに景色が変わりました。草原のような景色が続き、時々見かける集落も高床式の木造の家ばかり。農村部の多くの住宅には扉はなく、壁の壊れた部分を布で仕切っている家もありました。

そして、教育の機会にも都市部と農村部での格差があることが分かりました。首都プノンペンのあたりには小学校や高校、



▲ シェムリアップ州の農村の住宅

大学も沢山ありますが、カンボジア全体を見ると学校や教員の数が足りておらず、農村部だと学校があっても教師がいないという地域もあるそうです。UNESCO カンボジア事務所の方の話によると、農村部で教鞭をとる人には特別手当を出すなどの優遇措置を設けているそうですが、それでもまだ教員数は都市部に偏りがちであるとのことでした。



▲ 農村部の住宅のリビング

その上、貧富の格差も深刻です。プノンペンからシェムリアップに移動する途中で立ち寄ったマーケットで、私は生まれて初めて物乞いをされました。私に近づいてきたお婆さんは、英語で“Give me, sister!”と言いながら、私に手を差し出してきました。私はどうすればよいのか分からず、ただその場に立ち尽くしてしまいました。そしてそのとき、私は初めて「世界には今日一日を必死で生きている人がいる」ことを実感しました。今ま

では途上国の現状は本や新聞などでしか見聞きしたことがなく、物乞いをして生きなければいけない人々がいるのは、自分とは関係ない、どこか遠い場所のことなのだと心のどこかで自分に言い聞かせていたのだと思います。しかし、私はもう目を背けられません。日本のような先進国の人々は、毎日大量の食べ物を捨てていますが、その影響を受けているのは途上国の人々なのだと改めて感じました。貧困が深刻なのだと遠い国だったとしても、同じ地球で生きる一員として私たちがきちんと向き合わなければならないと強く思いました。

また、農村部ではまだ男女格差の意識が今も残る地域があることもわかりました。その原因の一つとして、「チュバップ・スレイ」という伝統的な“女性の法”があるそうです。この“女性の法”には「女性は静かにゆっくりと歩き、全ての動作においておとなしくなければならない」や、「女性は家事の行い方や家庭のきりもりの仕方を知っていなければならない」など、“良き妻”であるために女性の生き方を制限する決まりがあります。現在は若い人の間では男女平等を意識する人も多いとのことでしたが、農村部や年配の方の間では女の子は勉強するよりも家事をできるほうがよいという考えが今も残っているそうです。その影響もあるのか、私が一緒に活動した復学支援クラスでは生徒 12 人のうち女子は 2 人だけ。中学校・高等学校の生徒も男子生徒のほうが多いそうで、これもその“女性の法”が原因の一つであるとのことでした。そしてこの“女性の法”はかつては学校教育の場でも教えられていたと聞き、とても驚きました。どれだけ勉強したくても「女の子だから」というだけで学校や寺子屋に通えない子どもたちのことを想うと胸が苦しくなります。人々の中にある意識を変えるのは簡単ではありませんが、女性の権利について私たちはさらに声を大にしなければならぬと思いました。

今回実際にカンボジアの都市部と農村部の両方を訪問したことで、カンボジア国内の格差は想像以上に深刻であり、教育・経済・医療・人々の意識など、様々な面に表れていることがわかりました。そして、これらの格差をなくすためには、カンボジアの都市部の人々の協力も必要だと思いました。カンボジア国内でも、都市部の人々の中には農村部との格差をあまり問題視していない人も多いと思うので、まずは私たちが情報発信を行い、一人でも多くの人にその現状を伝えられるよう働きかけていきたいです。

## ◎カンボジアの歴史が残した貧困の連鎖

カンボジアでは、1975～1979年のポル・ポト政権時代に教師や医者、政治家などの知識人が大量虐殺された影響で、学校や教員の数が足りず、農村部では初等教育の質の充実が課題となっています。現在は小学校への就学率は少しずつ上がってきているものの、学校に通えないまま育ち、母国語であるクメール語の読み書きができない大人もいます。そのような大人の中には教育の重要さを十分に理解できていない人もおり、自分の子どもにも学校よりも働くことを優先させてしまう家庭もあるそう。親世代の教育事情が、今を生きる子どもたちの未来にまで影響しているのです。

そして、経済的な事情などで学校に通うことができずに育った人々の多くは、農民として農作物を作って暮らすか、賃金が低い工場などでの重労働に就くしかなく、これがさらなる貧困の連鎖の原因となるとのこと。また、学校での教育を受けられなければ、栄養・衛生問題などのように生活のために必要な知識を十分に身につけられないまま大人になってしまうケースもあります。すると、その子どもが栄養失調になったり、衛生状態の良くない水を飲んで病気になってしまったりし、さらに**貧困の連鎖**を生み出すことも考えられます。



▲ “Everyone Plays, Everyone Learns”  
(チョンクニア寺子屋)

そのため、子どもたちが当たり前のように初等教育を受けられる環境を作ることは、カンボジアが貧困の連鎖から脱出するための最重要課題なのではないかと私は感じました。これまで私は当たり前のように小学校を卒業し、中学校に進学し、高校に通ってきましたが、それはとても恵まれていることなのだと気づきました。そして私はこれまで、生きる上で大切な知識や基礎の多くを初等教育を通して身に付けてきたと思います。

すべての人が等しく教育の機会を受けられる社会を築き、**公立学校での義務教育の質を向上させる**ことで、カンボジアの子どもたちの未来は大きく広がるはずです。未来を担う世代の一人として、“誰一人として取り残さない未来”の実現を目指したいです。

## ◎一番心に刻まれた言葉

プノンペンのキリングフィールドを訪れた際、帰り際にガイドさんが私に伝えてくれた言葉が、私は今も忘れられません。

「今日、ここに来てどんな気持ちになった？もし自分もあのととき生きていたら、殺されてたかもしれない。でも、私は今、自分がこの時代に生まれてよかったとは思いません。」

この言葉を聞いた時、言葉を失いました。カンボジアの人々が自国の歴史をこのように捉えているのだということがあまりに衝撃的で、何が彼にそう思わせているのかわからず、滞在中も帰国





してからもずっとこの言葉に考えさせられました。

私の祖母が太平洋戦争を経験した一人だったこともあり、私自身も自分だけが平和な時代をぼんやりと生きていていいのかと思うことも何度かありました。しかし、私はこれまで戦争当時の誰かと自分を置き換えて考えたことはなく、戦火の中で苦しむ人々に思いをはせるどころか、「自分たちは平和な時代に生まれてよかったなあ」とさえ思っていました。

そんな私にとって、彼の「もしかしたら自分も殺されていたかもしれない」という思いはあまりにも複雑で、帰国後どれだけ考えてみても自分も同じように捉えることはできませんでした。しかし、この言葉からカンボジアの人々の“カンボジア人としての意識”の強さを知り、現地の人々が心に抱えている思いの大きさを感じることができました。そして、未来を生きる「私たちが」平和な未来を築かなければならないという思いがより一層強くなりました。

### ◎スタディツアーを通して

今回、私は“内側から見たカンボジア”をテーマにこのスタディツアーに臨みました。トゥールスレン虐殺博物館やキリングフィールドを訪れた際には、カンボジアの人々の中に刻まれた歴史の姿に、苦しくて涙が止まらなくなったこともありました。また、農村部での暮らしは想像を絶するもので、「本当に同じ地球なのだろうか」と目を疑ってしまうこともありました。



時にはカンボジアと日本のギャップに戸惑いつつも、その現状に向き合い、考える中で、カンボジアでの出会いは私のこれまでの考え方を大きく変えてくれました。貧困や教育、経済格差、食糧問題など様々な問題を抱えているカンボジアの現状を自分の目で確かめたことで、改めて日本や世界と向き合うきっかけにもなりました。そして、毎日を懸命に、前向きに生きているカンボジアの人々からたくさんの勇気ももらいました。

どれだけ遠くの国で起きている出来事だとしても、教育問題や貧困は決して他人事ではありません。きっと私たちの暮らしにどこかでつながっています。同じ地球で、共に未来を生きる地球市民の一員として、私たちは現実から目を背けてはいけなくと強く実感しました。

『戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない』——このスタディツアーを通して、UNESCO 憲章にあるこの言葉の重みが何十倍、何百倍にも増しました。カンボジアで出会ったすべての方々、ST を支えてくださった方々、そして共に学んだメンバーたちへは感謝の気持ちでいっぱいです。

この経験を生かし、より多くの人に教育と平和の大切さを伝えていきたいです。そして、平和な世界を目指して未来社会の一員として貢献できるよう、精一杯頑張りたいと思います。